



リワークの始め方とレベルアップガイド
—みんなで喜びを分かち合えるプログラムを目指して—

寺尾 岳 要 斉, 中島美鈴,
山下 瞳 著
星和書店
2024年3月 188頁
本体価格 1,800+税

そもそもリワークとは、いまや広く知られるようになったが、うつ病などの精神疾患のため休職を余儀なくされた労働者を職場に戻し、なおかつ、再休職の予防を目的とするリハビリテーションプログラムである。医療機関で行われるリワークを医療リワークと呼んでいるが、そもそも医療機関において始めること自体がハードルの高いことであり、私は筆者の一人である寺尾先生が大分大学医学部附属病院でリワークデイケアを大学キャンパス内の倉庫を改造したようなプレハブの建物で始めたころより知っているが、その施設が大学附属病院の内部でかなりの面積を取ったデイケア施設として開設されたときは大きな偉業であると実感した。なぜなら、独立採算で運営される国立大学で大きな収入源である附属病院内にかなりの面積を必要とするデイケア施設を作り上げるからにはそれなりの説得力のあるエビデンスが必要であるからである。多分、施設を作り上げるプロセスで寺尾先生は、スタッフの役割の重要性や利用者を通じてのリワークというリハビリテーションの確かな効果を感じ取られたのだと思う。そして、その経験を同じ九州で医療リワークを行っている要先生や中島先生の大学での講義を聞いていた寺尾先生の頭のなかに、ある

ひらめきが浮かんで結実したのが本書となったと、あとがきで書かれている。大分大学というフィールドと産業医科大学出身で産業精神保健に精通している寺尾先生という逸材なしに、本書は生まれることはなかったのだとしみじみ思う。

医療リワークを行う関係団体として本書の秀逸さを語るとすると、何とんでもなく日本うつ病リワーク協会の施設認定を実際に取得した医療機関の管理者が作成したガイドであり、認定取得までの道筋が実際に書かれており、これから施設の認定を受けようと考えている医療機関にとって非常に役立つ点である。要先生による認定委員会の認定基準を理解し、徹底した傾向分析を行い、正確な対策を立てて見事認定証を獲得されたレポートには敬服するばかりである。

かねてより、評者は治療機関であるすべての医療リワークが本来的には認定を取り、一定のレベルにあることを示すことは当然の方向性であると考えていた。そしてそのレベルを維持し高めていくために支払われる診療報酬はそれなりのレベルにあることも当然であるべきだと確信している。高い報酬を得ることに卑下する必要はない。確実な成果を利用者とその家族に提供し続けていくことは、本来的には社会や国家が施策において実現するべきもので、それが保障されない国民皆保険制度自体には存在意義があるとはいえないだろう。そういった方向で今後の医療リワークを捉えると、この認定制度はその根幹であり、すべての医療リワーク施設が認定されるべき制度として必然的に存在するので、本書の力も借りながらその実現に向けてさらに努力を続けていきたいと考えている。

(五十嵐良雄)